

おわりに - 「車中心」か「人中心」か -

新交通システム、LRTの導入によって様々なメリットがある。しかし、単純にLRTを導入すれば勝手にまちが活性化され、交通渋滞等の諸問題は一気に解決する、という安直な考えは大きな間違いである。現実には欧米各国の様々な都市でLRTが導入されているがその理由はそこに住む住民、行政や商店街、学生、高齢者が、自分達のまちの将来を真剣に考えた結果、「車中心」の都市構造よりも「人中心」のまちづくりを望んだ結果生まれたのである。そしてそのようなまちづくりの結果として、まちが活性化し、それとともに交通渋滞も解決することになったのである。

私はLRTの導入を行う場合にいきなり導入するのではなく、まず簡単に対応できる施策から行うことが必要であると考え。中でも一番重要なことは、最終的に住民の意識がLRT建設を行うべきという考えに傾いた時に事業を行うということである。もちろんLRTは様々な面においてメリットが存在し是非導入して欲しい事業である。しかしまちの将来を決める主役はそのまちに住む住民である。住民が望めば行えばよいであろうし、今のままで良いと望むのなら残念ではあるが行うべきではない。事業を行う前まで行政はその判断をするための情報提供を積極的に行うべき「黒子」に徹するべきである。しかし現状ではその情報提供は少ないと言わざるを得ない。まずは今まで以上の住民への積極的な情報提供が望まれる。その上で規制緩和、財源の問題等の諸課題を打ち破る施策を検討すべきであると感じる。

日本も現在、大きな転換点を迎えている。高齢化を迎えそれは将来の人口構造に大きな変化をもたらすであろう。その時、「車中心」なのか、それとも「人中心」のまちづくりを行っていくべきなのか、そこに住む住民全体が目先の利益に囚われず、知恵を出し合い長期的展望で考えるべき大きな課題であると感じる。宇都宮のLRT導入構想はまだ始まったばかりである。それは逆に日本における新交通システム先進都市への飛躍という無限の可能性を秘めているといっても過言ではないだろう。

参考文献・URL

脚注・引用・図表作成以外に使用した参考文献

井口雅一、山下恭生『新交通システム』（朝倉書店、1985年）。

宇都宮商工会議所『平成13年度都心循環バス実験運行事業報告書』（2002年）。

宇都宮まちづくり推進機構『平成12年度都心循環バス運行計画策定調査業務報告書』（2001年）。

新交通システム導入推進協議会『LRTがまちを変える』（2002年）。

鈴木文彦『路線バスの現在・未来』（グランプリ出版、2001年）。

鈴木文彦『路線バスの現在・未来PART2』（グランプリ出版、2001年）。

土屋正忠、武蔵野市建設部交通対策課『ムーバス快走す』（株式会社ぎょうせい、1996年）。

宮田親平『トラムのある街』（株式会社光人社、2001年）。

森五宏『トロリーバスが街を変える 都市交通システム革命』（株式会社リック、2001年）。

参考 URL

国土交通省 <http://www.mlit.go.jp/>

宇都宮市役所 <http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/>

栃木県庁 <http://www.pref.tochigi.jp/>

宇都宮まちづくり推進機構 http://www.ucatv.ne.jp/~u_kikoh/

RACDA 路面電車と都市の未来を考える会 <http://www1.harenet.ne.jp/~racda/index2.html>

路面電車とLRTを考える館 <http://www.urban.ne.jp/home/yaman/>

あとがき

私自身も宇都宮で新交通システムの導入が進んでいることは卒業論文を実際に進めていくまで詳細を知らなかった。それだけ新交通システムの導入計画が多くの住民に認知されていないように思われる。これから行うべき住民への認知と合意が、宇都宮での新交通システム導入が成功するか否かの鍵になっていると思われる。

私は 2002 年度まで行われている導入への調査結果が今後どうなっていくのか、卒業後も注視していきたい。そして今度宇都宮に来る時に、LRT がまちの中心市街地を颯爽と運行し、導入による様々なメリットが宇都宮のまちに生まれていることを願いたい。

最後にこの卒業論文を製作するに当たって御忙しい中数多くの資料の提供とインタビューに御協力して頂いた、宇都宮市役所企画部鈴木智氏、川中子武保氏、宇都宮まちづくり推進機構田野実正浩氏、国土交通省宇都宮国道工事事務所調査課綿貫稔紀氏、広島電鉄株式会社電車カンパニー電車技術グループ車両課三田博昭氏に御礼を申し上げたいと思います。そして何よりも演習時より様々な御指導、助言を頂き、また論文製作に当たって 1 年間御世話になった中村祐司先生にもこの場を借りて御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

2003 年 1 月 1 日

小島 周一郎